

千葉果弘先生から教えていただいたこと

千葉果弘先生が30余年にわたり奉職されたユネスコを後にしてICUに来られたのは1991年である。当時は、不登校などの教育病理現象がそれまでないほどに顕在化し、教育研究においてもある種のニヒリズムが蔓延してきたような時代であった。とくに戦後に期待されたような希望の学問としての教育学はその影を薄め、客観性を重視し、いわば他者の眼差しをもって教育現象を把握しようとする〈構え〉が私たち学生にも少なからぬ影響を与えていた。そんな時代に、千葉先生のように希望の教育学を語られる先生がいらしたことの意義は大きい。このことは、先生の着任以来、発展途上国の教育問題に関心を抱き、国際協力という現場へと巣立っていった学生が少なくないという事実からも傍証される。途上国への援助がともすれば先進国の一方的なエゴなのではないかという、いわば斜に構えた批判に対して、貧困という問題に対する感性の肌理を失ってはいけないこと、援助のあり方は多様であり、教育哲学の役割をその中に見出すことが重要であることなどを伝えてくださり、多くの学生を魅きつけてこられた。そして一歩踏み出すことの意味、フィールドに身をおいて考えることの意味、国際協力を生業とするものの意味を論じてくださった。

千葉先生が教えてくださったことは計り知れない。国際開発や国際理解の諸理論にとどまらず、いわば〈人生の妙味〉のようなものも含まれる。紙幅の都合上、ごく一部になるが、先生からいただいた〈メッセージ〉のいくつかを挙げさせていただく。

千葉先生の授業の助手として、まったく正当の

ない選択肢の質問群を用意するお手伝いをさせていただいたことがある。学生達はまさかすべての選択肢が誤りであるはずがないと思い込み、どれか「らしい」ものに○を付けていたが、全問正解者はほとんどいなかった。千葉先生がこうした意表をつく手法によって学生達に講義の初日から揺さぶりをかけた狙いは、人生における問いでは正当など用意されておらず、答えは自ら産み出さねばならないということを伝えるためでもあったようだ。このメッセージは、必ずしも言葉として表わされなくとも授業内外の節々で伝えていただいたように思う。

千葉先生が強調されていたまひとつのメッセージは、歴史をつくるのは必ず「ひと」であるということである。先生は現在の基礎教育開発の礎ともなっている、タイのジョムティエンで開催された「万人のための教育」国際会議をはじめ国際教育協力史に残る数々の記念碑的事業に携わってこられた。上のメッセージはエポックメイキングな国際事業の只中におられた先生ならではの説得力のある言葉であり、授業やアフター・クラスでの飲み会で国際教育協力の歴史を実際に築いてきた人物の話などを語ってくださったことは私たち学生にとってこの上ない財産となった。

さらに、千葉先生が示してくださったのはポイエシスの世界とテオリアの世界との共存の大切さである。先生は、この異次元ともいえる二つの空間をいとも容易に往き来してしまうダイナミズムを内に秘められていた。(内外の国際会議でも千葉先生を‘dynamic’と形容する言葉を幾度となく耳にした。)特定のテーマでの共通見解を指向する

国際会議では二進も三進もいかない状況にしばしば直面する。そんなとき理詰めの世界でなく、むしろ芸術的（詩的）世界が開かれると、ものごとが動くことがある。幸い、ICUを卒業してからも、千葉先生が国際セミナーの冒頭などでその場その時の状況をとらえた詩を即詠される場面に遭遇した。すると、不思議にも、煮詰まった感のある会議が「流れる」のである。千葉先生は、こうした人生の妙を身をもって示してくださった。実際に先生は詩人でもおられ、英文詩集も出されていることは周知のとおりである。その詩の一つひとつを通して、またご自身の生き方を通して、先生は、詩的感興をもつことと詩的許容を示されることの大切さを教えてくださった。

最後に、千葉先生の目の表情、すなわち、くまなざしについて言及しておきたい。千葉先生がICUに来られたとき、先生がキャンパスの中でも類稀なくまなざしを持っておられるという印象を受けた者は少なくないであろう。少なくとも私の周囲の院生の幾人かからそのような印象を聞いたことがある。それは、ユネスコという巨大な国際機構の中で鍛え抜かれた仕事に対する厳しさを内包したくまなざしであった。「いかなるミッションであろうとも、帰国便の機体がランディングしたときには、報告書は書き上げられていなくてはならない」。仕事に対する厳しさを表わす言葉である。こうした厳しいくまなざしの対極に、先生のやさしいくまなざしがあることを多くの門下生は知っている。仕事に対してはこの上なく厳

しい態度を示してくださった一方で、学生に対しては、人一倍やさしい思い遣りをもって接してくださった。卒業後、内外で千葉先生のユネスコ時代の同僚の方々と接する機会にふれ、いかに多くの国際人が千葉先生のこうしたくまなざしに感謝しているかを思い知るにいたった。これらのくまなざしに時には射られ、時には見守られながら、この十余年で数多くの教え子達が巣立っていった。

千葉先生と出会った学生の多くが実際にアジアやアフリカ諸国の第一線で活躍していることは驚きに値する。彼（女）らは教育を希望への実現プロセスとして捉え、日々、現実と向き合っている。たしかに世界全体の数知れない不幸と比べれば、そのく総力をもってしてもさしたる影響力とはなり得ないのかもしれない。しかし、千葉教室から灯されたスピリットは多くの地域で教育を必要とする子ども達や大人達に確実にとどいているのである。

教え子のひとりとして、千葉先生からお教えいただいたすべてのことに対して心より深謝の思いをお伝えしたい。本当に、ありがとうございます。

—— 永田 佳之 NAGATA, Yoshiyuki

● 国立教育政策研究所 National Institute for Educational Policy Research of Japan